
前世は母で、今世は・・・

神奈藤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

前世は母で、今世は・・・

【Nコード】

N6746L

【作者名】

神奈藤

【あらすじ】

前世の記憶を持った少年が、眼を覚ましたときそこは海だった。どうやら、そこは前世の自分が暮らした世界らしい。

なんか主人公が前世の家族に会いに行きます。

異世界迷い込み系、前世の記憶持ち厨二設定。

作者が厨二時代に書いた小説を、書き直しながら、投稿しております。

プロローグ（前書き）

厨二病時代の黒歴史の異物を書き直しながら投稿。

初投稿ゆえ、至らぬ点しかありませんが、お付き合いいただけたらうれしいです。

とりあえず、携帯で書いたからか短いです。

プロローグ

「俺、前世の記憶があるんだ」

それを聞いた友人は変な顔をしながら、俺が冗談を言ったのだと認識する。

それは間違ったことではないし、最初からこの話を信じてもらおうなんて思っているわけではなかった。

しかし、俺には前世の記憶があった。

前世の俺は、地球とは違う世界。いや、俺からしてみれば、地球のほうが異世界に近いのだが。

俺はその世界の、貴族の娘として生まれた。

姿も性別も違う。だが、かつての“あたし”を“俺”は“俺”だと認識できるし、むしろ、“俺”は“あたし”なのだ。

その世界でたった三十六年という短い人生だったが、“あたし”にとってしてみれば一生で、それは“俺”になった今でも変わらないわけだ。

あの世界に帰りたい。そう思わないわけではない。しかし、あの世界に行く術は俺にはない。

あの世界には“魔法”があった。しかしこの世界に、魔法がないことは、当の昔にわかつていることだ。

第一、異世界に行く魔法なんてものもなかった。

だから俺は、この記憶に段々と疑問を抱くようになった。

この記憶は俺の妄想なのではないか？

そう思うと恐怖だけが身体を蝕んだ。

俺の中で“あたし”だったころの自分が生きていた証拠は記憶にしかない。

真偽を確かめられず、恐怖に駆られるだけの俺にできたことは、

もし、あの世界に行く術を見つけたときのために、“あたし”の記憶を大事にすること、身体を鍛え、どんな状況にでも対応できるようにすることだけだった。

しかし、訪れることのない、異世界へ行く日の事を夢想することも、短くなり、大事にしていたはずの“あたし”の記憶も薄れ始めていた。

そして俺は十七年の歳月を過ごしたある日。

気づいたとき、俺は…海の上にいた。

♂♀

「どこだよ、ここ…」

独り言なんて言う性格でもないが、さすがにこんな状況では、自然と口から言葉が零れた。

塩の匂いが鼻につく。服が海水を吸って重くなっていた。

果たしてここはどこか？その疑問は解決している。ここは海だ。

みゃーみゃーと海猫がなく声が聞こえる。

体勢を変えると、少し離れたところに浜辺が見えた。

他に遊泳者がいないところを見ると、海水浴場では無いらしい。

はたまた遊泳禁止区域なのかもしれないが。

近くに船は通ってはいないが、海があるということは、近くに港もあるだろう。

「俺…コンビニに行く途中だったよな？ 何故海に？」

人はあまりに突拍子も無いことに会おうと、取り乱すことなく、逆に冷静になるらしい。というか、驚き過ぎて、頭が追いついていない。

とにかく、いくら夏とはいえ、服を着たまま、海水浴なんて趣味

はない。

浜辺が見えているのだから、そこまで泳ぐことにする。

五分程泳ぐと浜辺についた。

さすがに、服を着たまま泳ぐとなると、相当体力を削られる。肩で息をしながら、体にくっついた服を脱いで絞る。

ある程度絞り、水気の抜けたTシャツで、べたつく髪の毛を拭いてやる。

水気の抜いた服を、不快に思いながらも、もう一度身につける。海水を吸っているため、渴いたときの悲劇が、目の裏にありありと浮かぶが、無視。考えるだけで憂鬱だった。

ため息をついて、改めて辺りを見回した。

辺りに人はいない。助けて貰える当ては当然ない。

「でも、ここ……」

見覚えがある？

まさかと、自嘲する。

ここまで閑散とした海なんて、生まれてから来た記憶はない。

じゃあ、生まれるまえは？

「……ッ!？」

頭を殴られたような衝撃が走る。

前世の“あたし”の記憶を思い出し、この景色と合致するものを探し出す。

はっとなり振り返る。

浜辺から少し離れたところに、ある森から外れたところに、大きな樹がある。

記憶が正しければ、この樹に……

その樹に近付き、グルリと一周して手を近づけ、見付けた。

樹の皮をナイフで削り、そこに、彫られた古い傷跡。

地球で見た記憶はない。しかし、地球で覚えた言葉のどれよりも深く、慣れ親しんだ言葉。その樹に刻まれた文字は……

『新暦1975、リラ・ヘルヴァーン参上』

前世での自分の名。その痕跡。

「なんで、これが…」

そして確信する。

雲一つない快晴だった青空のはずなのに、急に影がさした。
とっさに顔をあげた。

「……グランティナ」

眼を疑った。

空に巨大な城が、飛んでいる。

空中国家、聖国グランティナ。

あの城の名前であり、ここが地球ではないという裏付け。

疑惑は確信へ。

かつて、数多の友と地を駆け、最愛の夫と子供達に看取られ、後
にした、前世の世界。

「——ディアナルト」

それが名前。

プロローグ（後書き）

主人公の名前決まっていなくていいんですよ。実は。

前世の名前もどしように悩んだくらいですものこれ。

とりあえず、主人公の性格は明るい子なので、ちょっとこれだけみると暗く見えますが。

とりあえずプロローグだけ、次回から少しずつ進展していきたいと思っています。

目標・三話くらいで本筋に乗りたいです。

第一話 ディアナルト（前書き）

国名とか名前とかの、固有名詞は響きだけで決めています。
また携帯でちまちま書いたんで、変換ミスとか、改行ミスとかがあるとおもいます。

第一話 ディアナルト

ディアナルトには、五つの大陸と、多数の島々、加えて空中都市。合わせて六つの国家が存在する。

その一つである空中国家グランティナを目撃したあと、彼は自分の記憶を掘り返していた。

新暦1972年。

前世、リライア・フィリス・ロド・ヘルヴァーン・ローウェルと言う名のかつての“彼女”が、まだ十五の頃だ。

その頃“彼女”は結婚しておらず、まだローウェル姓は名乗っていない。

リラはリオンルツツ帝国と、呼ばれる国の、ヘルヴァーン公爵家の次女として産まれた。

類い稀なる才能を持ち産まれたが、政治屋のヘルヴァーン家は彼女の才能を道具として、政略結婚など、政治の駆け引きの材料にしか、考えていなかった。

幼くも、聡明だったが、向こう見ずなりライア少女は、十二の頃にヘルヴァーン家を後にした。

そして、ここも放浪中に訪れた場所だった。

（確かここは、ビオレッタの首都から外れたどっかの村の近くだと思っただけど…）

浜辺を離れ、辺りを囲んでいた森の中の獣道を、彼は記憶を頼りに進んでいた。

リオンルツツと友好関係にあり、生涯の伴侶を見つけ、恐らくは自分の亡骸が眠っている、ビオレッタ王国。

その国のどこかの村の近くだと彼の記憶は応えていた。

しかし一度しか来た覚えはないし、最後に訪れてから死後の期間も含めたら軽く百年以上は経っているため、一度来たことを覚えていただけても奇跡に近い。そのためか、彼の表情にも焦りが浮か

び始めた。

記憶を掘り起こせど、自分が海ではしゃいだ記憶はあっても、どうやって近くの村まで行ったかは薄ぼんやりとしか覚えていない。何となく森を通った記憶がある。それだけだ。

そんな記憶から彼は、浜辺の近くの森に入り込み、運よく見付けられた獣道を歩いているだけで、実際のところ確証を持って歩いているわけではない。

言い方を変えたら、闇雲に歩いているだけに近い。

それに、この世界には、“魔物”がいる。

これもまた、言い方次第なのだろうけど、野生生物と言われても、間違いではない気がする。魔物の危険度もピンからキリだが、危険なものは、地球の山中で熊などに襲われるより危険である。

過去の自分なら、魔法や剣を巧に使い、苦無く撃退することができただろうが、魔法は使えるかわからないし、剣はない。

地球でこんな時のため——実際に起こるとは想定外だが——に鍛えた身体しか、対抗する手段はない。しかもそれまでここまで通じるかわかったもんじゃない。

つまるところ、彼は今、まさに生きるか死ぬかの瀬戸際だったりする。

（何とか、街道かなんかに出たいんだけどなあ…）

獣道を歩いていたら、魔物の住家に当たりそうだが…。

ため息を思い切り吐き出す。

（昔は、怖いものなんてなかったんだけどな…）

前世の強気な自分はどこへ消えたのか、少年にこの状況を楽しむ余裕は無かった。

幸い、日はまだ高く、夜行性のものが多い、魔物たちに襲われることは少ない。

日が陰るまでに、街道に出たいところ。

彼がそんなことを考えて獣道を歩いていると、遠くから馬の蹄のような音が聞こえた。

瞬間的に魔物の可能性を考え、警戒体制を取った。

だが、そのあとに馬車の車輪の特徴的な音が聞こえたため、安堵する。

そして、近くに馬車が通っているということは、街道が近いということだ。

彼は、その音のする方へ、向かって行った。

森の道なき道を直感だけで走り抜くと、やがて街道が見えてきた。助かったと安堵の息が漏れた次の瞬間には、草木が刈り取られ、地球のように舗装されているわけではないにしろ、人の手が入っていると見て取れる、街道へ踊り出た。

「やった——ッ!？」

自然と声を上げた。しかし、その声は馬のいななきと、馬のそれとは違う、獣の咆哮に掻き消された。

「ルヴォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!！」

踊り出た街道の先には、予想通り、馬車がいた。いたにはいたが、それに加えて余計なものまで、その街道にはいた。

馬車を引く馬の鼻先には、魔物がいた。

「——ッ!？」

猪のような体にコウモリの羽を生やした姿。

ピブロックと呼ばれる魔物だった。

「ひいっ!　く、来るなあ!」

馬車の御者台から怯えた青年の声が聞こえた。

前世のリラならば、迷わず剣を抜き、ピブロック位の下等魔獣、遅れを取ることもなく、一刀両断したことだろう。

だが彼は、動くことができなかった。

腰に、抜く剣はない。魔法は、と問われても使える保証はない。不発した時は、あの御者と馬、そして自分も死ぬことだろう。

だが、何も出来なければ、それもまた死ぬだけ。

馬の叫び声があがった。その時にはもう走り出していた。

どちらにしても死ぬなら足掻く。自分に恥じぬ生き方をする。人

を見殺しになんて出来ない。

かつての彼女は、そういう人間だ。保身なんて考えていない。

それは、転生した今も変わらない。

格好悪いことはしない。

それが、彼女の座右の銘だから――

「うおおおらあああああっ!!」

叫び声とともに彼のドロップキックが魔物に命中した。

――彼は、今世でも格好良く生きる。

第一話 ディアナルト（後書き）

進展がないですね（笑）。

小説書くのは難しいですわ。

今回は説明臭いですからね、まあ小説の導入だから仕方ないと言
い訳。

とりあえず次回も進展はないかもです（笑）。

さ、三話から大きく動くと思います！

気長に読んで下さい。

第二話 三年後（前書き）

毎度お馴染み神奈膝です。風邪を引きました。
ようやく新キャラ、そして主人公の名前がでます。

第二話 三年後

叫び声とともに、ドロップキックが命中した。

「ギュルヒインッ！」

魔物の体が宙に浮き、脇の茂みに吹っ飛んだ。

「あれ？」

声を上げたのは少年だ。御者台に座る青年は、呆氣に取られて、口が開いたままだ。

思った以上に威力があつたのだ。

いくら鍛えているとはいえ、普通の人間があれだけの威力を持つた蹴りを放てる訳がない。

前世の記憶があるというだけで、彼は基本的には人間なのだ。デアアナルトにすむ人間だって、魔物を普通の蹴りで吹っ飛ばすことはまず、無理だろう。

「ルヴォオオオオオオオオオオ！」

自分の蹴りの威力に、呆氣に取られたが、流石に蹴りだけで、魔物も倒れる訳が無く、再び叫び声を上げて茂みから飛び出す。

舌打ち一つ。彼は即座に拳を固く握りこんで、目の前に飛び出てきた、魔物へと打ち込む。

骨を砕く、メキメキという音が、耳まで届き、不快感が拳から全身へと伝わった。

再び、茂みに吹っ飛ぶかに思えたが、魔物は四つ足を踏ん張らせ、飛んでいく体にブレーキを掛けたのだ。頭蓋骨が砕かれたはずだが、魔物は唸り声を上げながら、少年を見据えていた。

流石の生命力に舌を巻いた。奴らの生存本能は尋常ではない。かつてであれば、魔力を乗せた、剣で一刀両断するのだが、残念ながら剣はない。

ならば、魔法は？

状況が変わったことを、少年は感じていた。

さっきまでの一刻を争う状況は過ぎ去り、今は予想以上に素手の攻撃が威力を持っていたことも関係し、少しばかりの余裕がでた。余裕といっても、魔法が使えるか使えないかの、確認程度の余裕だが、彼にとって、その余裕は大きく意味をした。

拳に、彼はイメージを流し込む。魔法に大切なのはイメージ。イメージに大切なものはそれに対する知識。

魔法とは、魔力を現実具現化する方法を指す。

無から有を生み出す、“創生”。生み出すためには、緻密なイメージと、それを裏付ける知識。

例えば火を起こすにしても、火の色や熱さ、焼ける匂い、音など、それらを具体的にイメージし、その現象が何故起こるかを説明できる知識が必要。

しかし、それも曖昧で、科学の発展していない、この世界では、現象の説明なんでもものは、神様の仕業とか、そんなふうと考えられ、大気中に広がる魔力と、杖などの触媒を利用して無理矢理現象を起こしていた。

その中で、少年は雷をイメージした。高校の教科書に載っていた、放電の原理を思い出し、知識の裏付けを用意。

バチリと静電気が弾けて音を鳴らす。

膨大な情報量が彼の中で巡り、拳を突き出す。

紫電が走り、雷鳴が轟く。周りの草木に衝撃が走り、少年の雷を孕んだ拳が魔物をえぐり、返り血すらも、雷が分解した。

後に残るのは、沈黙と、ピブロックと呼ばれる魔物の無惨な姿だけだった。

少年は突き出した拳をマジマジと凝視した。魔法は使えた。しかも想像を超える威力で。前世の最盛期でもこんな威力は出せたかわからない。

「あ……」

沈黙を破ったのは御者の青年だった。

搾り出すような声に振り向くと、青年はビクンと身体を震わす。

「…………大丈夫ですか？」

少年は氣遣って声を掛けた。

青年は真っ青な顔で硬直していた。

（まあ…怖がっても仕方ないよな…）

少年が同じ立場なら、同じ反応を取るだろう。

ふと馬を見ると、腰を抜かしたのかうずくまっていた。いや、よく見ると前足が魔物に折られたらしく、立ってられないのだ。

馬の痛がる息遣いが心苦しく、少年は近寄ってしゃがみ込む。攻撃魔法は使えた。ならば治癒はどうだろうか。

「すいません。水があっただけじゃないですか？」

「え？」

「水、この馬、足折れてるみたいだから、治そうと思って…」
「？」

青年は怪訝な顔をした。まるで、言葉が通じていないような…

「——あ」

少年はそこで、自分が日本語で話し掛けているのに気付いた。慌てて、この世界の共通語に直す。

「ああ、すみません。えっと…馬が怪我しているみたいなんですが、治してあげたいので少し水を、頂けませんか？」

ようやく、意思の疎通が取れて、青年は荷台から、水筒を取り出し、少年へ渡した。

少年は水筒の口を開けると、それを馬の前に置き、祈るように手を組んだ。

「——癒しよ」

少年は魔力を水に流した。魔法を使うとき、儀式的なものを省略するのに使う、触媒の変わりとして水を使ったのだ。

ちなみにさっきの雷なんかは、魔法の構成が単純だから、詠唱も触媒も必要とせずに具現化できた。

しかし、治癒魔法は、構造が複雑で、詠唱破棄や触媒抜きに発現することは困難極まりない。

少年が謡うように、詠唱すると、水が薄く光りをもち、水筒の口から漏れた光りが、馬の足を包み込んだ。

数秒もすると、馬の脚は元の位置に収まり、うずくまっていた馬は立ち上がって二、三度蹄を鳴らすと、感謝するように少年の顔を舐めた。

魔力を流した水は人体には毒なので、さっと捨てて、空になった水筒を青年に渡した。

水筒を渡すと、青年ははっとなって御者台から飛び降りると、額を地面にくっつけて叫ぶ。

「あ、ありがとうございます！　どこの高名な魔導師様かは存じあげませんが、お助けくださってありがとうございます！」

「あー…良いって。そんなじゃないし。ただの旅人だよ。それよりアンタ、商人かい？」

「は、はい！」

「ちょっと道に迷ってさ、街に出る途中なら、馬車に乗ってくれないかな？　もちろん迷惑でなければのなしだけどさ」

「そんな事くらいでしたら、是非乗って行ってください。命の恩人のお頼みを断ろうなら、末代まで笑われてしまう。ここからほんの一刻もすれば、セイルの街ですよ」

♂♀

青年、レビ・ブロックと名乗った若き商人が言った通り、一時間程度で、セイルの街についた。

その間少年は、連続する出来事に疲労して、荷台で寝かせてもらった。

街に着くとレビ青年に起こして貰い、食事をおごってくれるというので、厚意に甘えた。

セイルの街は、活気に満ちた街で、記憶によればビオレッタ王国の首都ケネルからそれほど遠くない街で、商人が拠点とする街でも

あった。レビ青年もこの商会に所属しているらしい。

地震の少ない国だから、地球という石造りの西洋建築の町並みで、レビ青年に案内された、この街の行きつけの店もまた、レンガで作られた、ちよつとこ洒落た店だった。

彼いわく、店は綺麗で、料理は美味く、何より安いところが良いらしい。

「それで、アイリさんは、首都に行くんですか？」

向かい側の席に座った、レビ青年が少年に聞いた。アイリというのは少年の名だ。高原愛理と、可愛らしい名前をもつが本人自身は気に入ってはいない。

「んー、まあな」

「アイリさん、リオンルツツの方ですよ？　ビオレッタにはどういった用件で？」

運ばれてきた、フォルチニと呼ばれる山菜スパゲッティのようなものを食べながら、アイリは眉をひそめた。

「なんでオレが、リオンルツツ人だと？」

「え、だって髪が金色で目は空色ですし…違いましたか？」

「……いや、違わない。リオンルツツの出だ、俺は」

なんだ、やっぱりと笑うレビ青年はどこかまだ、あどけなさが残っていた。

アイリは苦笑いをしながら髪のを押さえた。

母親がイギリス人で、その血を色濃く受け継いだがゆえ、日本人らしさがなく、金髪に碧眼という容姿であり、それで日本の学校では大分からかわれたが、こんなところで役に立つとは。アイリはこの髪の色にそつと感謝した。

もちろん、単純にその髪色が多いだけで、リオンルツツ人の全員が全員が金髪碧眼ではない。そう考えると、レビ青年には他意はないだろうが若干差別的な目で見られたのかとも思う。余談だが、ビオレッタ人の髪の色は結構ごっちゃりしていて、茶髪に銀髪、赤毛も金髪もいる。ちなみにレビ青年は短い茶髪だった。

「それで、どうしてビオレッタに？」

レビはニコニコしながら尋ねる。

「あー…まあ旅行かな。友達に会いに行くんだ」
適当に嘘をつく。

ビオレッタとリオンルッツは友好関係にあり、旅行者も多い。
しかし、友達なんて…。と思ってから、疑問が浮かんた。

「なあレビ：今年は何年新暦だっけ？」

「今年ですか？ 新暦1996年ですけど」

それが何かと首を傾げる。

新暦1996年。

リラが死んだのは1993年だから、その三年後。

「……そうか」

(カムイ…)

前世の伴侶を想う。

リラの死から三年。彼はどうしているだろうか。

地球にいたときから、彼と自分の子供達を考えていた。

転生し、違う世界に生まれ落ちても、彼は妻であり母である。

そして、今こうして、前世の忘れ形見に会えるチャンスを得た。

何故自分がこの世界に来れたか、未だ不明だが、今はそれに甘んじる。

彼にとって本当の世界は、ここだから。

「レビ：この街で金を稼げる場所はあるか？」

今必要なのは金だ。

「路銀が足りなくてさ、少しばかり稼いで行きたいんだ」

「ああ。なら街役場に行ってみたら良いですよ。街のギルドの依頼
状も集まっていますし、アイリさん強いから、すぐに稼げますよ」

レビは笑って答える。

「それと：これからケネルにでは、どれくらいかかる？」

「セイルからだ、馬車をつかってもだいたい、二、三日かかり
ますよ。うー、本来ならお送りしたいんですが、いかんせん、首都に

は行かないもので」

「いや、そこまでしてもらったら悪いよ」

「すみません。ああそうだ！　かわりにとってはなんですが、しばらくセイルにいるなら、知り合いの家に泊めてもらうよう頼んでみます。それとギルドへ紹介状も書きましょう！」

「え！　いやそれは願ったり叶ったりだが、良いのか？」

「命の恩人ですからね。商人は金と恩は忘れません」

レビはニカリと笑った。だからアイリも、笑って、厚意に甘える。相手の厚意は、受け取って、必ず返す。それが礼儀だと思っているから。

「ありがとう」

彼は笑って礼を言う。

第二話 三年後（後書き）

携帯で書くと面倒臭いこと書きたくなくなるから、自分にとっては簡潔な文章がかけてます。
次話、調展開予定。

第三話 思考・夢（前書き）

更新ペース遅い。ちよいながめよ

第三話 思考・夢

三日経った。

「んじゃあ、行くよ。世話になったなおっちゃん」

「なあに、レビ坊の命の恩人だ。商人は金と恩は忘れないんだよ。それに、稼いだ金で、ちゃんと、宿代を払ったお前さんに礼を言われる謂れもないぞ」

ガハハと笑う宿の家主。エルオと名乗った男は、レビ青年の商人の師であり、今は行商を辞め、セイルの街で妻と子供二人と暮らして、宿屋を営んでいる。

レビ青年が、しばらくアイリを置いておいてくれと、頼み、料金後払い、ようはツケで置いてもらったのだ。

そして三日間でアイリは、街のギルドに通い詰め、朝から晩まで魔物狩りを続けて金を集めた。この三日間で、アイリが気付いたことは、ディアナルトに来てから、体力や筋力が急激に上昇していること、魔力総量が増え、触媒無しにでも、ある程度の魔法なら発現できることだ。前世のリラの戦術にくらべ、身体も男性で、能力自体全て底上げされているため、ある程度無茶がきき、単純に強くなった事を理解したため、三日で路銀としては、ありすぎる程の金を集められたのだ。

服装も、この世界に来たときのもではなく、革のズボンに綿のシャツに革のジャケット。靴はブーツと街で売っていたものにすべて変えた。

元着ていた服は、海水を吸ってしまい持っていたも邪魔なので捨てた。街で買った外套は折り畳んで、背中のリュックサックに入れている。

そして腰には街で売っていた安っぽい鉄の直剣。長さで選んだため、ナマクラには違わない。

それと、安さで選んだ、杖を太ももにつけたベルトに挟んでいる。

タクトのように細く短い、見た目は木の棒で実際、加減しないとすぐに折れてしまいそうで、サポートにしか使えそうにないのだが、ないよりはマシという理由だけで、二束三文で購入した。

三日で稼いだにしては、充実した路銀があるにしても、装備まで、上等なものを揃えることは難しかったが、首都にでるのに、それほど危険な道を通る訳ではないため、正直高価な装備は必要としていなかった。

「全く、坊主。そんなナマクラ使ってたら腕が鈍るぜ？」

エルオが、アイリの腰の剣を見て言った。

「路銀がないんだ。これから首都に行くから、その宿代も必要だね。それに、ナマクラだって使い手によっては、名刀を超えるんだよ」

「へー。まあ俺は商人だからな。ナマクラか名刀かくらいはわかっても、使い手の良し悪しまではわからん」

「俺はそんじょそこらの、剣士よりは腕は立つと思うよ」

「言っとけ。まあ餞別はないが、また来たときは安くするぜ」

「ありがとうな。じゃあ達者で」

硬く握手を交わす。

どこの世界でも握手は共通して、平和の証である。そして手を離すと、アイリは、宿を後にした。

♂♀

街の東門に行くと、馬車が一台止まっていた。

首都に出るという、行商人が居たため、用心棒として雇ってもらい、首都までの足を確保しておいたのだ。

そして、その馬車が、アイリを雇った行商人。ラバステイン・コロアである。

「すみません！ 待たせました」

「んー。まあ出発まで時間はあったから、構わないよ。じゃあ行こ

うか？」

ラバステインは笑いながら、馬車の荷台を指差した。
アイリは頷いて、荷台に乗り込んだ。

♂♀

馬車の移動というのは遅い。

日本で暮らしたアイリは、その遅さを改めて痛感する。

レビに馬車に乗せてもらったときは、荷台で寝てたから、わからなかったが、自転車よりも遅い。

前世がディアナルトの出身であっても、十七年間地球の、科学の進歩した世界にいたためか、ひどく、馬車が辛かった。

科学は魔法よりも素晴らしいなんて思ってしまう。

ふとアイリは思う。ディアナルトに来てから、事あるごとに考えていたことだが、何故自分はこの世界に来れたのか？ 自分が生きていたディアナルトに、異世界に飛ぶ魔法はなかった。またそんな夢物語のような研究をする機関もしらない。召喚術なんてものも、存在するが、異世界から召喚した前例も、自分が知る限りはない。

もし、自分を召喚した人間がいたとして、何故海に落とされ、何故自分だったのか？

前世の記憶を持っていたから？ 正直、ディアナルトとの繋がりはそれくらいしかない。

溜め息をつく。正直、考えてもわからない。わからないことは、とりあえず保留。答えが出るかはわからないけれど…。

アイリは剣を引き抜いた。

なんともちようど良いところに、敵が現れてくれた。

「あ、アンタ！ 魔獣だ！」 ラバステインが、慌てた声をあげたときには、アイリは荷台から飛び出していた。

進行方向には、狼が三匹ほど、唸り声をあげて、飛び掛かるタイミングを伺っていた。

しかし、アイリの剣は、それが動きはじめるまえに、切り付けていた。返り血を浴びながら、二匹目、三匹目と切り捨てる。

軀に染み付いた、戦闘の記憶が的確に相手を切り捨て、返り血を浴びた身体と剣を魔法で洗い落とし、再びもそもそと荷台に戻る。

「あ、毛皮剥いだほうが良いか？」

戻ってから、思い出したように首をひょっこりだして、ラバステインに聞く。

「あ、た、頼む。それにしても、噂通り強いんだな」

「噂？ ああ、ギルドでやんちゃしすぎたか……」

アイリは毛皮を剥ぎ取りながら、苦笑した。

「若いのに。商人の俺から見ても、そうとう修羅場をくぐってるんだとわかるよ」

はは、とアイリは渴いた笑みを浮かべる。

「そんなそんな、まだまだ若輩者ってやつだよ」

「いやいや、若いのに謙遜するものじゃない。俺も小さい頃は、騎士に憧れたよ。アンタなら騎士にだってなんにだってなれるんじゃないか？」

ラバステインは笑いながら言ってくる。冗談で言っているのか、本気で言っているのか判断がつきにくいが、おそらく半々であろう。前世、リライアの記憶が蘇る。

リラは十六で結婚し、三人の子供を授かった。しかし、リラは子育てと並行して、十五年間、軍人として生きた。

『ビオレッタ王立騎士軍』。彼女が所属した、賢国ビオレッタの軍の最高峰。

リオンルツ人であった彼女がそこに所属していた理由は、簡潔に話せば、ひとえに夫であった、カムイ・ローウェルとビオレッタ王のおかげだった。

「あんた、リオンルツ人だろ？ 名高い『帝国連騎団』にだって、入団できるんじゃないか？」

「あー、無理無理。入団するまえに下等兵からはじめて、十年以上

訓練受けないと、なれないって聞いたことあるし。まあ戦果をあげれば、一躍拔擢つてのもあるだろうが、いきなり門を叩いたところで門前払いが良いとこさ」

アイリ自身、今の力に自信がない訳ではない。よほどの相手でないければ、一対一ならば負ける気はしない。

しかし、リオンルツツ帝国が求めるのは、一対一の決闘などの力ではない。多対多の戦争を想定とした強さである。

一の圧倒的な力よりも、複数による、戦略的に安全かつ圧倒的に勝てる力が、求められる。

時に武国などと称されるが、その力は、腕っ節だけではない。

だからこそ、世界最強と称されるのだ。

古臭い、しきたりなど何もなく、利だけを追求する国。それがリオンルツツ帝国である。

その無駄のない、緻密な機械のような在り方が性に合わず、リラはリオンルツツのヘルヴァーン家を出たのだ。

「それでも、アンタならなれる気がするけどな。おっと、行かなくてはな。馬も落ち着いたころだし」

笑いながら、ラバステインは再び荷台を勧めた。

♂
♀

そして最初の夜。

セイルからでて、ケネルまでだいたい三分の一程度の道程を上った。

明日は途中にある村に、物を売るため、到着はあと三日かかるという。

(三日……か)

普段は短い、一瞬にさえ思えるような、その三日も、今回ばかりはとても、とても長く思える。

火をおこして、その前で貰ったパンをかじりながら、アイリは空

を見上げた。

長らく見ていなかった、満天の星空。地球よりも大きい月の光が辺りを照らしていた。

改めて、ディアナルトに戻ってきたことを実感する。

「なあ、アンタなんで、ビオレッタに来たんだ？」

少し酒の入った、ラバステインが、アイリに問う。

「……ただの、旅行かな」

「またまた、そんなことって」

酒を勧められる。木のカップに注がれた、紫色の液体をチビリと舐めた。そして喉に流し込む。

喉元に安っぽい熱いアルコールが染み、口には淡い葡萄の酸味が広がる。

「……うまい」

「え!?!? な、なに泣いてるんだ」

言われて、アイリは目元を拭った。放浪中、魔物の襲撃を恐れながら、飲んでいた、あの安酒と同じ味がして、あまりの懐かしさに涙したのだ。

「い、いや…久しぶりの酒だったんで!」

アイリはごまかすように、再びカップに口を付けた。

「ああ、たしかに安酒でも、禁酒明けの酒は死ぬほどうまいな!」

そういつて、酒瓶からアイリのカップに再び、酒を注いだ。

アイリは照れ笑いを浮かべて、それを一口付けると、やがて、酔ったのか口を開く。

「逢いたい人がいるんだ」

「ん?」

陰の差した、アイリに一瞬戸惑いながら、ラバステインは自分のカップを煽って、聞いた。

「逢いたい人? それがビオレッタにいるのか?」

アイリは頷いて続ける。

「ビオレッタに、その…まあ…亡くなった知り合いの、家族が住んでるんだ。だから、その人たちに逢うために、ビオレッタに行くんだ」

ここがディアナルトのビオレッタだと知ったときから、アイリはそのことを決意していた。

前世の忘れ形見。最愛の夫と三人の子供達。

それを一目見たい。言葉を交わさずとも、遠目で良いから、姿を見たい。

それが妻であり母であったアイリの心からの願いだった。

「つまり、墓参りってことか？ その亡くなったって人とは、よほど仲が良かったんだな」

え？ 墓？

「あ」

アイリはマヌケな声をあげた。

ラバステインがどうした？ と声をかけるが、そんなものはもう届かない。

三年前、自分はこの地に眠った。

ならば、当然、墓があるわけで…。

「……なんか、複雑な気分だよ」

前世で過ごした魂はここにあり、前世を駆け巡った身体は、朽ち果てている。

「大丈夫か？」

「あー、大丈夫！ つか湿っぽい話はやめやめ。さっさと寝るぜ」

大丈夫ではあるが、若干の憂鬱さが漂いはじめたので、アイリは強引に話を打ち切ると、毛布をまとして仮眠をとる。

賊や、魔獣の襲撃があるため、完全に寝ているわけではないが、剣は抜けるように、柄に手を当てておく。

ラバステインは、まずいことを聞いたかもしれないと、バツの悪そうな顔をして、おやすみとアイリに声をかけて毛布を頭から被って寝た。

そうして夜は過ぎていった。

♂
♀

夢を見た。

繰り返し、見続けているため新鮮味はないし、内容もとても楽しめるものではない。

天蓋付きの豪華なベッドに青白い顔をして眠る、前世の”あたし”。

その周りで、陰鬱な顔で見守る四人の家族。

光るような、”俺”と同じ金髪の”あたし”。それと対照的な銀髪をもった、最愛の夫がそっと頭を撫でた。

頭を撫でられて、クマの広がった眼を開いた。”あたし”は小さく微笑む。

『なに、陰鬱な顔してるのよ…』

『——お母様！』

末娘が、眼を開いた”あたし”に抱き着いた。

『気分はどうだ？』

ヒゲを蓄えた、夫が問う。

『最高！……って言ってやりたいけどね。あたしももうダメかな……。こんなに、早く死ぬなら、もっと無理しとくんだったわ』

『母様！』

次男が、”死ぬ”といった”あたし”の言葉に、鋭敏に反応した。

『母様は死なない！……きっと良い治癒師か、薬が——ッ！』

次男の言葉を長男が制した。

『母上。もう、避けられないのですか？』

長男の声は、いつもよりも覇気が無く、疲れた声だった。

『兄さん！』

次男が吠えた。末娘は”あたし”の身体にしがみついて泣いている。

『もう、あたしは十分過ぎるほど、無茶をした。もう無茶はきかないのね。神様がいて、運命があるなら：認めたくないけれど、これがあたしの運命だったのよ』

病床に伏せてから、”あたし”は、その運命を受け入れた。

認めたくはなかったが……。次男の握る手と、末娘のしがみつく力が強くなった。

『アンタらねー。少しはお兄ちゃんを見習いなさいよ。いい、リフオン？ アンタがこの家を継ぐかどうかは、知らない。けど、そんなケチなしがらみに、捕われて、自分のやるべき道を見失うんじゃないわよ？ アンタは一番賢いんだから。あ、でもこの子たちの兄であること、あたしたちの子だってことは忘れないでね』

”あたし”に名前を呼ばれた長男は、その言葉を聞いて、ゆっくりと頷いた。

『クロノ。アンタはいつまでも甘ったれね。でも兄弟妹の中で一番優しい子。あたしがいなくなっても、くじけずその優しさを、アンタ以外の人にしっかり向けなさい。優しさは愛される才能だから。アナタならきつと誰からも愛される子になれるわ』

次男は、”あたし”の手を強く握りながら、嫌だ嫌だと、泣きながら繰り返す。

その頭を撫でたくても、”あたし”の腕はもうあがらない。

『エリナ。そんなに泣いたら、あたし似の可愛い顔が崩れるわ。まあ泣き顔も可愛いけど。せつかく女の子が産まれたのに、あんまり構ってあげられないでごめんね？ エリナ。アンタは笑いなさい。女の子の笑顔は武器よ？ それと、もっと自由に、強く生きなさい。アンタはあたしに一番似てるから、臆病になりがちだけど、自由の味を知りたいなら、強くなりなさい。大丈夫。アンタが兄弟妹で一番強い子なんだから』

末娘は”あたし”の言葉を聞き流さないように、泣きながらしっかりと”あたし”の眼をみている。

三者三様の様子に満足する。心残りはない。

『カムイ。アンタには一言だけ。逢えてよかった』

泣いているのだろうか？ ” あたし ” の視界はもうぼやけ始めて

いて、はっきりとは見えない。

『じゃあね。皆。愛してるわ。今までも、これからも』

そうして夢は終わるのだった。

第三話 思考・夢（後書き）

あれ本題に乗らない…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6746/>

前世は母で、今世は・・・

2010年10月9日20時46分発行